

富山典彦先生の生徒と「赤ずきん」を読む  
——2020 年前期「比較文化演習 a」の授業報告

高 名 康 文

富山先生が亡くなったのは、開講の週の5月10日の日曜日のことでした。9日に、急に入院をすることになったという先生のメールが学科のメーリングリストに投稿された翌日でした。ご家族にとってもそうだったということですが、学科の教員にとっては、あまりにも突然のことでした。コロナ禍の影響で、お葬式に伺うことも叶わず、学科主任の中野先生と、ドイツ文学担当の時田先生を中心に、先生が担当するはずだった科目の割り振りが行われました。そのような中、学科メーリングリストを通じて時田先生より、ドイツ語担当者の負担があまりにも大きいので、「比較文化演習」を、フランス語担当者のどなたかが引き受けてくれないか、というお願いがありました。

ヨーロッパ文化学科のフランス語のスタッフは5人いますが、この話しは私に向かっていていると思い、手をあげました。学部で担当している授業は、現代フランス論とはいえ、中世フランス文学が専門で、ここ数年は、ドイツ文学の方々との共同研究で、中世宮廷文学の独仏比較の手伝いというような仕事もしてきました。また、『狐物語』という動物が出てくる物語を研究の中心に据えてきましたので、本学の柳田文庫や、民俗学研究所の活動にはもとより関心を持っていたからです。

思いがけなくまわってきた機会に、いろいろやってみたいこともありましたが、結局富山先生の前期シラバスに書かれていたことを、前期と後期にわけてやることになりました。この原稿を書いているのは11月の中旬で、後期の授業がちょうど折り返し点にさしかかったというタイミングです。前期も後期も、準備と、演習という授業の性質上、自転車操業にはなりましたが、富山先生が遺してくれたシラバスと、先生のことを好きで授業に登録してくれていた学生のおかげでどうにか乗り越えることができそうです。追悼号に前期の授業の報告を書くことを、先生への手向けとしたいと思います。

富山先生が遺した、前期完結の授業のシラバスは、シャルル・ペローとグリム兄弟の、「赤ずきん」と「灰かぶり」(「シンデレラ」のこと。ペロー版では「サンドリヨン」)の比較というものでした。それを目にして、思い出したことがあります。富山先生は、ここ数年の学科会議で、ヨーロッパ文化学科は、本来、ドイツ語圏とフランス語圏両方の文化圏について学ぶ場所であるということ、学科会議の、特にゼミの振り分けに関わる局面で繰り返し発言しておられました。成城大学文芸学部のヨーロッパ文化学科は、設立当初は、あらゆる学生がドイツ語とフランス語の両方を履修することになっていたのですが、初習の外国語を2つ学ばせるというのは、学生の負担が大きいということになり、どちらか一方を学べばよいということになりました。その結果、3年次以降のゼミや演習で、フランス語やドイツ語が既習であることを履修条件とするなら、学生が片方の文化圏のことしか学べないということが生じています。これは、学科の本来の理想に反することだから、学生が両方の文化圏の授業を学ぶことができるように、教員の側で配慮しなくてはいけない、というのが、富山先生の発言の趣旨だったように思います。

富山先生は、関西出身者独特のほやきぶりで、比較文化の演習とゼミが、単位取得に困った学生たちの一種の「お助け寺」のような役割も担っているので、教えるのが大変だということも、よくおっしゃっていました。その言葉は、フランス語を履修していない学生が現代フランス論ゼミを希望することを喜ばない私にも向けられていると感じていました。ゼミの性質上、フランス語ができなければ、十分に勉強することができない、というのは間違いではないのですが、最近になって、日本語で十分に文献があるテーマを選ぶ学生は、ドイツ語履修でも受け入れるようになったのは、富山先生の言葉があったからです。

シラバスを目にした時、他にも思い出したことがあります。昨年度のゼミ振り分けは、富山先生が担当なさったのですが、学科会議の際に、やはりドイツ語とフランス語の垣根を取り払いたいというお話があり、「僕は、来年は、ペローとグリムの比較の授業をする」と仰っていたのです。その際は、翻訳を使うのだろう、というぐらいに思っていたのですが、先生がWebClass（成城大学のLMS—学習管理システム—）に遺した、遠隔授業の進め方に関する文書を開けたところ、そうではなかったことがわかりました。先生の最後の学生へのメッセージです。ご家族の了解も頂けましたので、少し長くなりますが、全文引用させていただきます。

さて、皆さん、2020年度前期の「比較文化演習 a」では、ペローとグリム兄弟の『赤頭巾ちゃん』の比較ということをやってみたいと思います。

シャルル・ペロー Charles Perrault (1628～1703) 自身は貴族ではありませんが、フランスの宮廷社会に生きた人物です。この当時のフランス宮廷は、あの太陽王のルイ十四世が君臨していた時代です。ペローの『コント』あるいは『妖精の物語』は、ある意味ではフランス貴族の子女の教育という目的があったと言ってもいいでしょう。ただし、この本はどいうわけか、ペローの息子の名前で出版されています。

一方、グリム兄弟は、ヤーコプ・グリム Jacob Grimm (1785～1863) とヴィルヘルム・グリム Wilhelm Grimm (1786～1859) の1歳違いの兄弟のことを言いますが、そのほかにも何人か弟たちがいて、ヤーコプとヴィルヘルムのすぐ年下の弟は、『グリム童話集』の挿絵を描いています。

今、『グリム童話集』と言ってしまいましたが、これは必ずしも正しく

ありません。原文では、Kinder-und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm で、『グリム兄弟によって収集された子供と家庭のメルヘン集』ということになります。この「収集された」というのが大きなポイントで、グリム兄弟はメルヘンを創作したのではなく、ドイツ各地に語り継がれてきたメルヘン、日本語で言えば「民話」を収集した、ということになっています。

ここで、グリム兄弟が活躍したであろう年代を考えてみてください。ナポレオンによって、それまでのドイツ諸邦は再編され、ナポレオン失脚後、ドイツは「統一」に向けて大きく前進し始めます。

ナポレオンをどうするかについて開かれたウィーン会議に、ヤーコブは参加したと伝えられていますが、この時点ですでに、『メルヘン集』の初版は刊行されています。ということを見ると、グリムのメルヘン集は、ドイツ統一に向けて、ドイツ人の共通性を求めるという姿勢があったことは確かです。

ただし、実は、グリム兄弟は、多少嘘をついています。というのも、「ドイツ各地に伝わるメルヘンを収集した」と言いながら、ハッセンプフルーク家の姉妹から、かなりの「ネタ」を仕入れているのです。この家ですが、ナントの勅令が廃止されてフランスから逃れてきたプロテスタントの家系です。彼女たちは、ペローの『コント』をすでに知っていて、それをグリム兄弟に語ったのでした。

ということで、『赤頭巾ちゃん』がグリムの『メルヘン集』に入っているのです。そのほかに、『シンでレラ』もありますし、初版では『長靴をはいた猫』や『青髯』もあったのですが、この2つは第2版以降削除されました。

『赤頭巾ちゃん』を知らない人はいないと思います。かなり以前の携帯電話のコマーシャルで、「赤頭巾ちゃんは森に行って帰ってきました」などと、超短縮して紹介されていましたが、実は、これは間違いです。ということで、ペローとグリムの『赤頭巾ちゃん』を原文で読みながら、比較していきたいと思います。フランス語選択の人はペローを、ドイツ語選択の人はグリムを、それぞれ読んで訳してください。訳したうえで、気がついたことがあれば、それをコメントして提出してください。この教材は、5月13日用のものですが、これ以後、授業時間の1週間以前にWebClassに掲載しますので、それをダウンロードして、今述べた作業を5月13日の24時までにWebClassの「メッセージ」またはぼくのメールアドレスまたはWebClassの「テスト」で送ってください。できれば、この3つの方法のすべてを試してもらえれば、どれが一番使い勝手がいいかわかりますので、最初はすべてやってみてください。

なお、著作権等の問題がありますので、ダウンロードした資料等はSNSなどにアップしないでください。

成績は、定期試験がありませんので、毎回の「コメントペーパー」によって評価しますので、質問なども含めて、自由に書いて提出してください。

以上の文面の下には、ペローとグリムによる「赤ずきん」の冒頭の原文が並んでいました。退職を2年先にひかえていた富山先生は、みずから、ドイツ語とフランス語の両方を扱うという姿勢を示そうとしていたのです。

先生は、この文面を5月2日にアップしたようです。訳の締切に定めていた5月13日は水曜日で、先生の第一回の授業が行われる予定の日でした。そ

の日は、奇しくも、先生の家族葬が営まれた日でもありました。私が、この文章を目にしたのは、担当することが正式に決まってからのことで、13日を過ぎてからのことです。

冒頭に触れた、富山先生から学科メンバーに届いた9日のメールには、深刻な病状で入院することになったが、遠隔授業であることを利用して、病院から授業を行うとありました。また、13日の午後には、Facebookの先生のアカウントに、ご令嬢の侑美さんによるお葬式の報告があったのですが、先生は、授業の道具を一揃えまとめて抱えて、歩いて病院に向かう途中で倒れたのだということが書かれていました。先生は、病院のベッドの上で、フランス語とドイツ語のテキストに関する質問に答えようとしていたのです。

学科会議での先生の言葉がよみがえり、私もグリム兄弟のドイツ語に取り組んでみようという気になりました。私は、トブラとロマッチによる古フランス語辞典や、ヴァルトブルクのフランス語源辞典をひくために、ドイツ語は日常的に読んでいますが、告白すると、それは、辞書でほぼすべての単語をひきながらのことです。フランス中世文学の研究者として、ヨーロッパ文化学科の教員として、この程度のことでいいのか、という思いが常にありました。病院のベッドで、学生の訳やコメントペーパーを読んで、教材を作ろうとしていた先生の気持ちを思えば、先生ができたであろうことには、及ばないにしても、先生のやろうとしていたことの一部でもやれるように努力をしようという気になりました。

教務課とは、授業をさらに2回休講させてもらおうと話しをつけました。まだ、富山先生のゼミ生以外には伝わっていなかったのですが、担当者の交代のアナウンスがありましたので、その理由を知らせるために、15日の夕刻に、受講生に以下の文面を送りました。

教務課から担当者交替の連絡があったと思います。とても悲しいことに、富山先生は5月10日に逝去されました。私たち教員にとっても突然のことでした。

このような場合、大学は、みなさんの権利が損なわれることがないように図らなくてはなりません。中世フランス文学が専門の私が、先生の演習を担当することになりました。

ただし、突然のことですので、準備が行き届きません。20日と23日は休講とさせていただきます、準備をさせていただきます。

シラバスも一部変更することになるでしょうが、評価の仕方はそのまま受け継ぐことになるはずです。案がかたまり次第、WebClassでお知らせしたいと思います。

[中略]

私の専門は中世フランス文学と書きましたが、『狐物語』という動物がでてくる物語をよく勉強してきましたので、日本の『遠野物語』や説教寓話の狐との比較をしてみたいと思ってきました。フランスのアーサー王伝説とドイツのアーサー王伝説の比較にも関心があります。富山先生と同じことはできませんが、できるだけのことをしていきます。

2週間程度時間をとりたかったのですが、土曜日に水曜日の授業が入る週で、結局1週間しか時間がとれませんでした。その間、時田先生に案内を乞いながら、『グリム童話集』の翻訳や、グリムに関する高木昌史先生の著作を手元に揃えました。また、かつて私が、「ヨーロッパ文化実習Ⅱ」(ヨーロッ



パ文化学科の2年生の必修科目で、各専任教員が、それぞれのゼミで学べることを講義するオムニバスの授業)の世話係を私がしていた時、富山先生が配布した比較文化論の参考文献一覧にあった、マックス・リュティの日本語訳も一通り揃えました。そして、時田先生にインターネットの [wikisource.org](http://wikisource.org) には、『グリム兄弟によって収集された子供と家庭のメルヘン集』の第1版から最終版(第7版)までが収められてると教えてもらい、目を通しました。富山先生が引用しているテキストは第7版でしたし、岩波文庫の金田鬼一訳も、ちくま文庫の野村滋訳も第7版に基づいているので、引き続きこの版を読むことにしました。幸い、ドイツ語は身につけていないものの、中級程度の文法書は、何回も繰り返して読んできましたので、辞書をひきながら、子どもにも開かれた1300単語弱のテキストを最後まで読むのはそれほど苦にはなりませんでした。現代ドイツ語と違う部分については、質問をすれば、時田先生が丁寧に教えてくれました。ペローの『コント』は、前任校では担当していた、文学の演習の授業で読んだことがありました。

授業の進め方は、富山先生と同じく、教材をLMSを通じて配布する完全オンデマンド方式にしました。1週目に富山先生が訳を提出させていましたので、2週目(私の第1回)に、訳を発表します。ペローのテキストは私の訳を発表しましたが、グリムは金田鬼一訳にしました。訳に関する質問と、2つのテキストの比較、さらに、新しい部分の訳を課題にして、第3週の、授業前日までに送ってもらいます。第3週には、訳についての質問への回答と、比較のコメントに関する講評を発表します。これをずっと繰り返していく、ということを行いました。

このようなローテーションを設けたのは、コメントペーパーへの講評や、訳の質問の回答のために時間をとるためでした。フランス語だけであれば、

教室でいきなり出てきた質問にも、たいていはその場で答えることができますが、ドイツ語に関する質問には、準備をしても、辞書で確認しないで答える自信はありません。このことは、遠隔授業であることがかえって幸いしました。

グリムに関して翻訳を用いたのは、私も、自分でドイツ語から訳したものを、「教室」で「商品」として出すほどには、厚かましくなかったから、ということ。1929年から34年に訳された金田訳を用いたのは、これが岩波文庫で現在も入手できるということの他に、原文を読んでみると、当然のことながら、一字一句を正確に理解した上で、こどもに語って聞かせて理解してもらえるような日本語にする、という配慮を感じるころが多かったからです。日本語としての表現が古いことが、かえって学生の興味をひくのではないかという期待もありました。また、金田訳に触発されて、私のペローの訳も、なるべく自然な日本語にということを意識したものになりました。

辞書をひきながら訳したばかりの学生にとっては違和感のある訳だったせいか、ペローのテキストについても、グリムのテキストについても、辞書の定義と訳が違うという質問がたくさん来ました。そのたびに、辞書の定義どおりに訳して、日本語として通らないものになるのであれば、意味がない、辞書の訳語は、原語と完全に重なることはないのだから、用例の一つ一つに別の訳があると考えた方がよい、ということを説いて、可能な限り金田訳と私の訳の擁護を行いました。比較文化論の中で重要な位置をしめる翻訳論にもなったのではないかと考えています。

生徒には、私はドイツ語は辞書なしでは読めない、と正直に言っていたのですが、毎回、ドイツ語に関しても、語彙や語法や、翻訳の日本語に関してたくさんの質問がきたのは、意外であり、また、勉強になりました。特に前

期の授業では、訳に関する質問は義務だと思っていた学生が大勢いたようです。しばらく、このことについて書きたいと思います。

語彙や語法に関する質問は、多くの私自身も疑問に感じて、辞書で調べをつけたり、時田先生に教えてもらったりしていたところでしたので、それほど困ることはありませんでした。無音の h や、現代語ではあまりでてこない代名詞の縮約、男性名詞・中性名詞の単数 3 格に -e の語尾がつく例が出てくるのが分かりましたので、課題を出す際には、注釈をつけておくことにしました。そうして、単語の同定さえできてしまえば、『クラウン独和辞典』や、小学館の『独和大辞典』を使えば、語法については、大体の説明はできました。

私にとって勉強になり、生徒にとってもよい情報を提供するきっかけになったという質問はたくさんありましたが、毎回のように、「これは、意識ですか?」という質問が出たのは、金田訳の擬音語と擬態語でした。たとえば、狼がおばあさんを丸呑みにしてしまう場面では、klopfen が「(扉を) とんとんとたたく」と、drücken が「(取ってを) ぐいっと押す」、aufspringen が「(戸が) ぴんとあく」、verschlucken が「(おばあさんを) ぐいぐい、鶯のみにしてしまう」と訳されています。学生たちとのやりとりを通して、オノマトペが豊富で多用されるという日本語の特性を説明することができました。また、扉が「ぴんと開く」の「ぴん」のように、廃れてしまったオノマトペがあることも説明ができました。金田訳を使うことで、日本語とドイツ語の比較、現代の日本語と、約 90 年前の日本語の比較もできたのです。その際には、著作権フリーの日本語文学テキストを集めた「青空文庫」をデータベースとして使って、20 世紀初頭の用例を探るといような研究方法も紹介できました。そうこうしていると、課題の訳で、意識的にオノマトペを使う学生が出てき

ました。

質問のお陰でドイツ語の理解を深められた、ということもありました。たとえば、上にあげた *verschlucken* の訳語の「鶉呑み」がわからないという微笑ましい質問がありましたが、お陰で、これが、「食べる」ではなくて「飲み込む」という意味であることに思いが至り、その後の展開の伏線になっていることを理解し、解説することができました。

さらに、グリム版で、おばあさんのベッドに横たわる狼と赤ずきんの問答の場面で、狼の、*„Daß ich dich besser packen kann.“*（金田訳では、「これでなきゃ、おまえがうまくつかめやしないやあね」）についても質問があったのですが、それに答えるために、「つかむ」と訳されている *packen* について調べ直したところ、人が「つかまえる」の他に、イヌなどが「噛みつく」という意味があることがわかりました。つまり、人間と動物にまたがって使われる語であり、狼は、この語を使うことで、半分自分の正体をばらしているのです。それに続く赤ずきんの、*„was hast du für ein entsetzlich großes Maul!“*（金田訳では、「おばあさまのお口の大きいこと」）の *Maul* は、人間ではなく動物の「口」ですので、赤ずきんは、狼の台詞の意味を理解して、正体をわかった上で飲み込まれたということになります。比較のコメントペーパーの中に、グリム版での問答に関して、最初に出てくる「耳」と「目」が、接触を前提としないのに対して、「手」と「口」が、捕らえて食べることを意味しているから、赤ずきんは、「手」のところで狼の正体に気がついたのだろう、というコメントがあったのですが、その指摘が正しいことを、原文に立ち帰って説明することができました。

また、この、狼とおばあさん、狼と赤ずきんの問答では、

„Ei, Großmutter, was hast du für große Ohren!“

„Daß ich dich besser hören kann.“

„Ei, Großmutter, was hast du für große Augen!“

„Daß ich dich besser sehen kann.“

というように、ほとんど同じ単語が使われているのに、訳が

「あらまあ、おばあさま。おばあさまのお耳、おっそろしく大きいのねえ」

「だから、おまえの言うことが、よくきこえるのさ。」

「まあ、おばあさま、おばあさまの目え目、ずいぶん大きいのねえ」

「これでなきゃ、おめがよくみえやしないやあね。」

というように、異なっているのはなぜか、という質問がありました。原文を引用して、ほぼ一字一句変わらず繰り返されていることを確認し、リュティを引用しながら、このような繰り返しが昔話の特徴になっており、文化史的な古層に属するのであろう、呪的な効果が認められることを説明し、ヴァリアントを与えようとした金田訳はある意味、その特性を損なっている、ということをお返答としました。素直に発した問いが、広い文脈に通じていた、という種類の質問であったと思います。

以上のように、この授業のドイツ語に関する部分は、オンデマンド形式の授業がもたらすタイムラグを利用して可能になりました。ドイツ語のことはわかりが印象に残っていますが、私の本職のフランス語に関する部分についても書くことにしましょう。

ペロー版のテキストに関しては、富山先生は、17世紀の綴りのテキストを課題に出していましたが、学生の戸惑いが大きかったので、2回目の課題からは、Folio classique から出ているジャン＝ピエール・コリネによる、現代フランス語の綴りに改めたテキストに切り替えました。この版に載っている語釈は、現代フランス語とは意味がずれて使われているものがほとんどですが、それに加えて、学生が特に誤解しそうなものにも語釈を加えて、テキストの提示を行いました。こちらに関しても、たくさんの質問がきましたが、時には、こちらが示しておいた語釈について、「なぜそうなるのか？」という疑問がきました。たとえば、「おばあさん」には、現代フランス語の *grand-mère* ではなく、*mère-grand* が使われていますが、なぜそういうことが起こるのか、という類いの質問です。できるだけ、「昔はそうだった」で済ませるのではなく、リトレの仏仏辞典やヴァルトブルクの語源辞典を用いて、用例や歴史の変遷の過程にも触れながら説明をするようにしました。語法の違いについても同様です。その際には、google ブックスの用例検索の結果を紹介することもしました。教師にとって勉強になるばかりではなく、歴史的なテキストを読むとはどういうことを伝える機会になりました。本年度より、大学院で、歴史言語学を担当している私の特性を活かすことができました。

以上のように、学生の質問に答えようとすることで、私自身がドイツ語の理解を深めて、理解したことを、毎回の教材に反映することができました。また、どのレベルで話しをすればよいのかも明確になりました。まかりなりにも、原文に基づく比較文学の授業になったのではないかと考えています。

以下には、学生から寄せられた、ペロー版とグリム版の比較のコメントについて述べます。だいたいパラレルに話しが進むように両作品のテキストを提示しながら、学生には、どこが違うか指摘して、その違いは何によるか考

えなさい、という課題を出していました。

印象的だったのは、学生は、実によく、本質的なことに気がつくということでした。冒頭の場面で、両作品で、お母さんの台詞で、おばあさんが病気だからお見舞いにいきなさいということが言われるのですが、ペロー版では状況説明と指示が簡潔に言われるだけなのに対して、グリム版では、暑くならないうちに行け、森で道草を喰うな、おばあさんのところに着いたらちゃんと挨拶をしろ、というように、実に細かい指示を出します。これは、両作品で設定されている赤ずきんの年齢に関わってくることなのですが、学生たちのコメントの中には、冒頭の場面しか読んでいないのに、すでにそのことを指摘してくるものがありました。(コメントペーパーを読む限りは、ペロー版の展開をすでに知っていた学生はいないようでした。)

更に、両作品とも、赤ずきんが町外れの森にさしかかると、すぐに狼に声をかけられて、狼に聞かれるがままに、その日の計画を全部話してしまうのですが、ペロー版の地の文で赤ずきんについて言っている *pauvre enfant* を、私が「哀れな子ども」と訳していることにも、すぐに、「哀れ」とは「愚か」というニュアンスがあるととってよいのか、というコメントがきました。また、グリムの赤ずきんは、ずいぶんと活発に描かれているというコメントもありました。

ペロー版の赤ずきんは、狼に食べられてお終い、という結末を持つことに加えて、女子は、言い寄ってくる男を部屋に入れるなという教訓詩で終わることから、愚かな振る舞いをして性的暴行の被害にあうな、という教訓話であることが明らかです。それに対して、グリム版は、狩人による救済のエピソードがおかれることで、復活譚を通した成長譚になっています。冒頭の10行程度で、ペローの赤ずきんは、ある程度の年齢に達している愚かな少女と

して描かれているのに対して、グリムの赤ずきんは、幼くて活発な子という設定ができていうわけですが、すでにそのことに反応している学生がいた、というわけです。

この段階で、「赤ずきん」には、「女の子があんまり愚かだと、狼（＝男性）に食べられて（＝襲われて）しまうぞ」という含意があるということは明言した上で、ペローの結末については明かさず、性的な含意については、論じても論じなくてもよいということで授業を進めていきました。そういう読み方をすることに違和感を感じる学生がいると思ったからです。とはいえ、ペロー版の結論は上に書いた通りですので、最後には、「性的な含意がある聞いて、まさかとは思ったけれど、やっぱりそうだと納得した」というコメントが来しました。

他に注目されたこととしては、おばあさんの家が、ペロー版では村はずれの森の近くにあるらしいのに対して、グリム版では森の中にあるということがありました。グリムが民衆の想像力の源泉をドイツの森に求めたことを反映しているのではないかと、というコメントが複数ありました。上に紹介した富山先生のコメントにもありましたが、グリムが、ペローの『コント』にもあった「青髭」や「長靴を履いた猫」を、初版よりも後にはカットしながら、「赤ずきん」を残している理由の一つには、結末や、森のただ中という舞台設定で、ペローとの差異化ができたということによるのではないかと、ということ、私は考えています。

また、ペロー版では、狼が赤ずきんからいったん離れる理由として、「木こりを怖れた」と書かれていることについて、なぜ木こりが怖いのがわからない、というコメントがありました。これを紹介したところ、ペローが狼の恐れを合理化するために理由付けしているのではないかとコメントや、



ペロー版では登場しなかった木こりが、グリム版では狩人として登場して、赤ずきんとおばあさんの救済者となるという読みができました。

授業でできた読みは他にもありますが、学生のコメントペーパーを使った作品の読みのまとめとして、第6回の授業の講評で行った要約を紹介しておきます。

1. グリムの描写よりも、ペローの描写の方がそっけない。その結果、ペローの話よりもグリムの話の方が長い。
2. それは、グリムは、赤ずきんやおばあさんに物語の聞き手の同情が集まるような書きかたをしているが、ペローは、「哀れな」赤ずきんというような書き方で済ませていることによる。言い換えれば、グリムは、赤ずきんやおばあさんによりそのような書き方をしているのに対して、ペローは、突き放すような書き方をしているということである。
3. ペローは、貴族の子女（自分の子どもを含む）に、愚かな村人のようなふるまいをしたら、お前たちもそうになってしまうぞというメッセージを伝えようとしている。それに対して、グリムは、赤ずきんやおばあさんのような民衆に向けて、知恵をつけて、怖い目にあわないようにしようというような書き方をしている。
4. どうやら、グリムの物語の舞台は森のただ中、ペローの物語の舞台は村はずれということになっている。他の童話がそうであるように、グリムは民衆の想像力の源泉をドイツの森に求めているようだ。
5. 狼に襲われないようにしろ（しよう）というメッセージには、悪い男に騙されないように（もっと直接的に書けば、襲われないように）気を付けようという含意がある。

最後に、コメントペーパーの利用を中心に展開した授業運営について述べることにします。

前期完結の授業では、両作品の比較のコメントでは字数に制限を設けなかったため、学生のコメントの長さは、はじめはまちまちでした。講評での紹介を通じて、300字から400字程度は書いて下さいということに落ち着いていきましたが、中には800字、後半になると1000字以上書いてくる学生もでてきました。熱心に取り組む学生がでてきた、ということですが、過剰な負担をさせているのではないかと、心配にもなりました。このため、後期の授業で「シンデレラ」と「眠れる森の美女」をとりあげた際には、400字程度と定めて、システムで500字の字数制限を設けました。

登録者は、50人以上いましたが、ヨーロッパ文化学科の演習の授業としては、多い数です。ドイツ語履修者も、フランス語履修者も受けられるように、という、富山先生が高木先生から受け継いだ配慮と、富山先生のお人柄の賜でしょう。受講者からくる質問、コメントに応じて、毎回、「ペローの訳に関する質問に対する回答」、「グリムの訳に関する質問に対する回答」、「両テキストの比較コメントに関する講評」という教材、さらには、「前回のテキストの訳」、「今週の課題」という教材を作りました。また、前期の授業では、授業教材で、質問に対する回答や講評を行う他に、もらったコメント一つ一つに、短くてもコメントをつけるということをしていました。このため、週に3日はまるまるこの授業にとられるということになってしまいました。病院のベッドの上では無理ではなかったか、とも思いますが、富山先生であれば、もっと効率よく、目配りのよい授業ができたことでしょう。急ごしらえの比較文化演習担当者としては、こうせざるをえなかったというのが本当のところです。ただし、それは、担当者にとっては、学生のコメントから学問的な

刺激を絶えず受けるという、濃厚で幸せな時間でした。(後期の授業では、個々のコメントに関するコメントはなし、ということにさせてもらっています。)

成績は、富山先生のアナウンスの通りに、コメントペーパーのみに基づいてつけました。前期は訳させるテキストが短かったということもあり、訳と訳に関する質問が3割、比較のコメントが7割で、毎回点数を伝えました。比較コメントの長さや内容にはある程度の相関関係がありますので、内容だけを客観的に判断することは難しかったです。どうしても、長く書いたものにはいい点数をつけることになりがちだ、というのも、後期に字数制限を設けた理由です。

以上のようなやり方で、前期の授業は行いました。富山先生が思っていたように、ではないでしょうが、比較文化の演習という体裁は、どうにか整えられたのではないかと考えています。

結語として、個人的な富山先生の思い出と謝辞を述べます。先生には、私の採用人事に学科主任としてお世話いただきました。実は、その時、給与を人事課に問い合わせてもらいたい、という私のお願いに答えてもらえなかったということがありました。私は判然としない思いを抱き、陰で文句さえ言っていたのですが、赴任してくると、先生は、まったく何もなかったように、「関西人同士、仲良くしましょう」と声をかけてくれました。先生が作業室や共用研究室で大量のコメントペーパーに向き合っている姿や、学科会議での発言に垣間見られる、学生への細かい配慮にはすぐに気がつきました。卒業式では、北山先生と並んで多くの学生に囲まれて写真撮影をしていました。ドイツ語検定試験の会場準備のため、車を出している様子もみました。先生

の裏のない人柄を知るに及び、しばらく時間はかかりましたが、赴任の時の経緯についても、先生は学科主任として当時の規則に則ったままで、まったく、私に含むところはなかったし、自分の判断に間違いと思うところもないのだ、と確信を抱くに至りました。年賀状を差し上げたら、奥様からうちの子どもたちへと、お菓子を頂くということもありました。facebookの「友だち」にもなり、関西人同士で、日常生活や仕事の「ぼやき」に反応しあうようになりました。私が教授になる時は、教授会で業績報告の副査も務めていただきました。気がついたら、恩人になっていました。

富山先生のご退職の時は、そのような思い出断をしたいと思っていました。先生は、私の当初の思いを聞いて驚かれたかもしれませんが、きっと、「今後も仲良くしましょう」と言ってくれたと思っています。

先生の授業を引き受けることになるとは、思ってもいないことでしたが、学生たちの、まっすぐな素直さに支えられています。ドイツ語ができないはずの私が、普通にドイツ語の質問に答えているとは、教室とはなんと不思議な場所なのでしょう？それは、生徒に対して優しくかった先生が遺してくれた場所にいたから、実感できたことなのだと思います。生きている先生に報告をしたかったことですが、それは叶わぬことです。

幸い、業績と実績のある後任の先生に来て頂けることになったので、私の成城大学での比較文化論の授業は今年限りとなりますが、今年の実験をこれからの自分の授業に反映させていきたいと思っています。